
森の密談

北 郷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

森の密談

【Nコード】

N7886H

【作者名】

北郷

【あらすじ】

森の雌達のしたたかな企みに、人間の男が振り回される。だが、それを助けたのは人間の女性であった。

(前書き)

このお話は、フィクションです。登場する全てのもものは実在のものとは一切関係ありません。

真夏の太陽が山間に沈み、森は夜に包まれていく。

ほとんどの森の生き物は、一日の休息に入り、賑やかだった日中の森の音は疎らとなっていく。

今日も、静かに一日の終わりを迎えようとしていた。

雲間から見え隠れしていた月が南中に指しかかる。

その時、それを待っていたかのように一匹の大きなキツネが、月明かりを頼りに動き出した。

妙に色香のあるキツネである。

キツネは音を立てずに、軽快な動きで森の中を駆け抜けて行く。

やがて、小さな水の流れにぶつかり、今度は上流へ向かって上って行く。

少し行くと、流れの源である湧水に差し掛かり、そこでしなやかな脚を止めた。

湧水の直ぐ側には、この辺りで一際大きな杉の木が天に向かってそびえている。

その木影から、数体の影が静かに姿を現わし、キツネを出迎えた。

影達はキツネを交え、湧水の横で小さな円陣を組み顔を寄せ合う。まるで、影達は何かの相談をしているかのように見える。

月が雲間から姿を現し、影達に明かりを灯すと、影達の正体が映し出された。

影達は、この辺りに古くから住み着いているタヌキ、テン、ヘビ、カワウソであった。

そこに、飼いなごらしい毛並みの綺麗なネコが、円の中心に加わると、獣達の表情は、人の様に豊かになる。

獣達は、鳴き声を立てるところか、自分のポジションから微動だにしないが、表情のみは様々な変化をみせている。

この奇妙な光景が暫らくの間続いたが、月が西に沈む頃には、そ

れぞれが四方に散って行った。

翌日もやはり、ほぼ同じ時刻に同じメンバーが円陣を組む。定期会議をするかの様である。

ただ、昨日と違うのは円陣の中心はネコではなくて、タヌキが加えて来た雑誌の切り抜きであることだ。ネコは写真を囲む円陣の中に加わっている。

さらに翌日の中心には、カワウソが持って来た眼鏡が。さらに翌日には、ヘビが少年漫画の切れ端を。さらに翌日はキツネがくわえて来た名刺が中心におかれる。

こんな日替わりの集会が始まってから5日続いた。

そして、6日目にテンがピンク色の花を6本啜えて来て、この集会が最後となった。

その翌日から・・・

列車は山間部をスピードを落として進む。この山間部を抜けると、目指す北佐和高原駅に到着する。

この列車に一人の旅行者が乗っている。名前は、タキタ田北サトシ聡。大学を卒業後、製菓メーカーに就職。今年で9年目の31才になるサラリーマンである。

大学時代の友人が、昨夏から実家の後を継いで温泉旅館を営んでおり、その友人の誘いで二泊三日ののんびり温泉旅行に行くために、列車移動をしている最中である。

「この温泉に来るのは、確か大学3年の時以来だから、ちょうど10年ぶりになるのか。あつと言う間だな」聡が思い出に浸る。

彼がこの温泉に来たのは、大学が夏休みに入って間もなくの時だった。

余り有名ではないが、森の中には沼地や清流が流れており、ハイ

キングに訪れる人も結構多い。その為、友人（川田直樹^{カワタ ナオキ}）の実家の旅館も夏が稼ぎ時である。

当然の如く友人の川田（聡は”カワ”と呼んでいる）も夏は実家の手伝いに戻っていた。

聡も彼の誘いで、夏休みの1か月間を住み込みのアルバイトでここで過ごしたのだった。

カワは、何とその時の宿泊客である女子大生の1人（三奈美^{ミナミ}）と3年前に結婚したのだ。

付き合い始めた頃に、聡は彼女にカワのどこが気に入ったのか聞いてみたことがある。何でも彼女は眼鏡の似合うやさしい人が好みだったと言うことであった。

それを聞いた、視力1.5の聡は単純にも眼鏡をかけて見ようと思っただけだった。

そんな学生時代の思い出に浸っていると、間もなく列車は駅に着いた。駅舎は10年前と殆ど変わっておらず懐かしい匂いだと聡は感じた。

温泉地にあるカワの旅館は、駅前の通りを真直ぐに10分程度歩いたところに在り、数件の旅館や民宿が点在している。

前もって連絡をすれば各宿泊施設の車が迎えに来るのだが、聡は敢えて歩いて旅館まで向うことにした。

今とは違って、楽しかった頃の懐かしさに浸りたい気持ちがそうさせたのだ。

駅前の道は緩やかな登り坂の真直ぐな道で、温泉地の少し手前に分かれ道がある。そこまでを背の高い杉並木が続く。聡は並木道を懐かしげに歩を進める。

分かれた道の先には、10年前に何度か行ったことがある小さな清流の流れるハイキングコースがある。

聡がその分かれ道に差し掛かると、藪の中が何やらゴソゴソと騒がしい。何か生き物が動いているような音がしている。

(んっ、何だろ?) ちよつと背筋に寒気が走ったが、興味の方が勝り聡の足を止めさせた。すると、藪の中から”ひよい”と一匹のキツネが跳び出して来た。

不意を突かれてしまった聡は、驚きのあまり身体を半身にして少しのけ反る。

「大きいキツネだなあ。びっくりした〜。」と呟く。通常の2倍はあるつかと言う大きなキツネが直ぐ目の前にいる。

良く見ると、キツネは口に何かを咥えている。

(なんだ、花か? キツネって、そんな生き物だっけ?) キツネは濃いピンク色の花を1輪加えていた。しかも、このキツネ妙に色っぽい。

キツネは、優々と聡の前を通り過ぎていくが、通り過ぎ様に聡に向って振り向き、何か言いたげに目を合わせたのだ。

聡は、ちよつと気持ち悪さにゾクゾクとする寒気を感じながらも、キツネに対する(負けるか)と言う気持ちで見つめ返した。

キツネは、聡の気持ちを無視するかのように向き直ると、平然と藪の中に消えて行った。キツネの様は、人間と思わせるような理知さと優雅さが見て取れた。

不思議にもキツネが通った後は、ずっと嗅いでいたくなるような、凄く惹かれる芳しい匂いが漂っている。

(何処かで嗅いだ様な匂いだけど・・・。なんだ? 最近嗅いだような...) 山の中には場違いな匂いである。(あっ? この間付き合いで行ったキャバクラの女の子の匂いに似てるなあ。キツネって女の子の匂いがするんだっけ?) そんな訳が無い。

(花の匂い?) そんな訳も無い。

(気のせいかな? まあ、どうでもでもいいか。) 聡は気にするのを止めて、再び旅館に向けて歩を進めだした。

旅館が見えるところまで来ると、友人のカワが営む旅館の前で、大きく手を振る3人の影が見える。

自分に手を振っているんだろうか？ 聡は後ろを振り向いて見るが誰もいない。

どう考えても自分に手を振っているとしか思えない。

（誰だ？）手を振るべきかな？と考えながら歩を進めると、どうも手を振っているのは友人のカワと妻の三奈美であることが分った。（あいつのキャラ変わったのか？）と思いながら聡も付き合いで手を振って答えた。

（もう一人の女性はだれだろう？）一番一生懸命手を振っている女性が気になる。

カワ夫妻には、予め移動する列車を伝えてあったので、迎えに外に出ていてくれていたのだ。

旅館についた聡に「ようこそ」カワが笑顔で言う。

「いらつしやいませ」妻の三奈美が迎える。

旅館の玄関に目を向けてから聡が答える。

「久しぶり。 改築したんだ」

「あゝ。 入口だけな。 もう3年になるよ」

「そうか。 それ以外はいつしよだな。 何も変わっていないよ」 聡は10年前そのままでなかったことが少し残念だった。

「おまえキャラ、明るくなったな」

「そうか。 . . . この生活が合っているのかもな」カワが笑顔で答える。

聡はさつきから、三奈美の隣にもう一人女性が立っていることが気になって、視線がちらつとそちらに向く。

カワは聡の視線に気が付き、妻の三奈美に肘をぶつけて合図する。「聡くんに紹介したい人がいるの。 と言っても既に横にいるんだけど」

「えっ？」ある程度の察しがつきながらも、反射的に驚いた振りをしてしまう。 良くある照れ隠しの反応だ。

「初めまして。 今井愛子と言います」にこにこ全く臆すること

もなく挨拶をしてくる。

「あつ、あ、初めまして田北聡です」つられて聡も挨拶をしたが、何の照れもない、はきはきとした愛子の挨拶に面食らってしまった、ぶつきら棒な喋りになってしまった。

「私の友達なんだけど、いい娘だよ聡くん。・・・と言うことなんだけど。どお？」と、三奈美は真剣な顔をわざと作り聡の目をのぞき見る。そして、聡の表情を楽しむかの様に笑う。

全ての状況を理解した聡は、顔には出さないようしながらも、何か久々にウキウキするような感覚を味わっていた。

カワ夫妻は、31才で彼女もない聡と、28才で彼氏のいない彼女を会わせるため二人を招いたのだった。要するに形式ばらないお見合いと言うことになる。

ただ、彼女には事前承諾を得ており、聡に対しては敢え何も言わないで、リアクションを楽しもうと言うのがカワ夫妻の策略であった。

カワ夫妻は紹介だけを済ますと、旅館の仕事に戻っていった。戻り際にカワは、今朝花を加えた妙に色っぽいカワウソに出会ったと、面白げに話していた。

聡も負けじと、花を加えた妙に色っぽい大きなキツネを見かけた話をすると、三奈美が「つまらなくい」と冗談を言っていると思いき爆笑していた。

カワ夫妻が仕事に戻ってしまい、愛子と聡の二人だけとなったしまったが、時間はまだ午後2時で夕食までにはかなりの時間がある。せっかくなのでと言う愛子の誘いで、近くの沼まで二人で散歩に行ってみるようになった。

愛子は、明るく話題を切らさない女性であった。どんな話題も聡の興味を引かせる話術があり、聡は次第に魅かれていつていること

を自分でも意識をしていた。

愛子は焼肉のたれで有名な食品会社で經理をしており、聡の会社とは地下鉄で駅二つのところであることが分った。

食べ歩き好きな愛子と、製菓会社に勤める聡は、スイーツの話で盛り上がった。

聡は、食べ物のお話をきっかけに、今晚の夕食の誘いをしたかったが、旅館の食事は部屋で取るために誘うことをためらっていた。そこへ逆に愛子から食事を誘われ、聡の部屋で一緒に夕食を取る事になった。全て積極的な愛子のペースで進んでいる。

沼までの散歩から帰って来ると、旅館の前にパトカーが止まっており、カワと警察が何か話をしていた。

カワの話では、2日前に20代後半のホテルの従業員男性1人が、そして昨夜別の旅館に宿泊していた男子大学生2人が出かけたまま、今日になっても帰って来ないとのこと、捜索願いがでたとのことである。

相次ぐ行方不明により、警察が聞き込みと注意を促しにこの辺一帯を回っているとのことである。

行方不明になっているのは男性ばかり、それも若い男性ばかりとのことであった。

「お互い若いから気をつけようや」とカワが聡に言ってきた。

「微妙だな」と聡が応えると

「独身は、まだ若いつもりでいるのかー、まっお前は見た目も中身も若いよ」と、カワからのお褒めの言葉が返って来た。

「お前こそ若いよ」と、社交辞令を言う

「若さを競うようになったら、すっかりおじさんね。」と愛子も話に加わってきた。

聡には、こんな他愛もない会話が懐かしく、楽しかった。

ちよつと照れたが、愛子と一緒に夕食を取りたい件を敢えて平然を装ってカワに伝えると、カワも三奈美も敢えて聡に突っ込みを入

れず、笑顔で了解をしてくれ、その場を別れた。
肝心なところは流石に大人の対応であった。

午後6時の時報の様に愛子はオンタイムに聡の部屋に現れた。聡は浴衣姿でなかったのが少し残念に思えた。

夕食のメインは、地元牛のサイコロステーキを固形燃料でその場で焼くもので、そこでも愛子は笑いを振りまいてくれた。

「私ね、くさい食べ物が好きなの。」

「ギョーザとか、ニラとかを？」

「そう、特にニンニクの入ったものが大好きなの。例えばね、この肉には・・・」と言ってなにやら膝の上に乗せていた水色のポーチの中から小瓶を取り出した。

そして、愛子は小瓶を開封し、おもむろに焼きあがった肉の中に入っている褐色の液体をたっぷりとかけ始めた。そして、肉を一つを掴まんで美味しそうに食べる。

「あゝ美味しい」

聡は、爆笑だった。

「良かった、ウケてくれて」

「ちよつと心配だったんだ、笑ってくれるか」

「笑うさ、自前のたれを出されりゃ。まさか、インディーズ芸人じゃないよね」

「まさか。ただのお笑い好きOLよ！ それと臭いものも好き。商売柄」

「それは、会社の”焼肉のたれ”？」聡が聞くと

「そう、うちの商品の試供品」と言っつて、にっつと笑う。

「くさいものは嫌い？」と愛子にきかれ

「いや、結構好きだよ。特にガーリックはね」とにっつと笑い返すと、愛子は小瓶を渡してくれた。

聡も、貰った焼肉のタレをかけると、「ありがとう」と、ウケ狙いで小瓶をポケットにしまう。

「ワハハハ」愛子が笑う。

「良かった受けて。」

「受けたところで、もう一本。」愛子のポーチからもう一本出てきた。

聡のポケットは”焼肉のたれ”でおもいつきり膨らんだ。

こここのところ、毎日が流されるままに過ぎていた聡にとつて為、愛子との出会いは久しぶりに楽しい一時であった。

聡の宿泊する部屋は旅館の正面側の二階で、入口から出入りする人が良く見える。

食事も終え、ベランダ側にある椅子に向かい合って座り、部屋に備え付けの冷蔵庫にあった缶チューハイを飲んでいた。

「あれ、直樹さん何処に行くのかしら」愛子がカワらしき人を見つけた。

聡が窓の外を覗き込んだ時には木陰に入ってしまった見えなくなっていた。

その後、あまり気にせず愛子の会社での出来事や、カワ夫妻の結婚前の話を互いにバラシあうことで盛り上がった。

午後8時を回ろうとしていた。そこに、三奈美がやって来た。

「うちのひと来てるでしょ」

「えっ？いや来てないけど？」聡が応える。

「あっそう。・・・何処に行ったのかしら？もう1時間位見当たらないんだけど。」

愛子が思い出したように、窓の外を指した。

「さつき、窓から旅館から出て行くのを見たわよ。多分、直樹さんに間違いないと思うけど。何時頃だったかしら」

「本当？」三奈美は不思議そうである。

「多分1時間位前だと思うけど」聡が応える。

「この忙しい時に何処に行ったのかしら？ 聡さん達がいらしているから早く仕事を終わらせようって言ってたのに」三奈美は困惑した表情を浮かべた。

「携帯は持ってないの？」

「それが、置きっぱなしで出て行ってるの。だから直ぐに戻ると思ってたんだけど…。全くしょうがないなあ」

「久しぶりに旅館の仕事も悪くないかな。学生時代を思い出すなー」聡は腕捲くりをして、楽しげな顔を浮かべた。

「そんなの悪いわ」と三奈美はいいながらも、目はしたたかに懇願している雰囲気がある。

それを見た愛子は「決まり！ 皆で旅館ごっこね」

「旅館ごっこが終わったら4人で飲みますか」

こうして、二人は夕食の後片付けを手伝うことになったが、多少お酒が入っていたので、洗い場を担当することにした。

一時間がちよつとが過ぎ、夕食の片付けや布団の用意が終わる頃には、三奈美の顔に心配と不安が募っていた。

「昼間のお巡りさんの話しが気になるんだけど。良く考えるとね、いなくなり方が似てるの。それに、あの人今まで黙っていなくなる事無かつたし」

「警察に連絡しましょ！ もし、戻って来たら、みんなで頭下げればいいよ」愛子の言葉に背中を押され、三奈美は電話に手を掛けた。その時、聡の鼻を心地良く攪る芳しい香りがロビーの窓から微量に流れ込んで来た。

どこかで嗅いだ記憶のある匂い。

「何の匂いだ？」女性が発生させる芳しい匂いがする。

聡は窓の外を覗いてみた。

すると、窓の外には大きなキツネが一匹こちらに向かってお座りをしている。口には、ピンク色の花を啜えている。妙に色っぽい。

（昼間のキツネか？）

心地良い香りが、強く聡の鼻を攪り、この匂いから離れたくな

い衝動にかられる。

もう、夕食の小量のお酒もすっかり醒めているはずなのに、次第に気持ち良くなっていき、その香りに縛られていく。

聡は香りに釣られて、玄関に向かう。

「聡さん何処に行くの？」聡には愛子の問い掛けも余り頭に入らないうちに来ない。

「ちよつと捜して来る」と、虚ろな声で聡は愛子に応えはするが、聡には応えている感覚が全くない。

聡が外に出ると、そこには色白で姿勢の良い聡好みの綺麗な女が立っていた。浴衣姿の良く似合う一見清楚な女だ。

聡は当然であるかの様にその女に引き寄せられていく。女の前まで行くと、女は笑顔で聡の手を取り歩を進めようとする。

聡は、何か行つては行けないような気がした。

何か戻らないと行けない気がした。

聡は途惑いで脚を止める。

その時、更にあの芳しい香りが強くなる。聡は更に空ろな眼差しになり、再び女に導かれていく。

二人は旅館の前から姿を消した。

静かに、しかし、異様な位の速さで森の中へと入って行った。

三奈美の電話を見守っていた愛子は、電話が終わると、聡を追おうと玄関に飛び出た。通りまで出て見たが、そこには聡の影すらも消えていた。

(こんなに早く?) 愛子は、嫌な予感がした。

聡は夢心地のまま高揚感を感じ、次第に興奮を覚えていく。

何か、してはならないように思えるのだが、欲望を止められない。

女のうなじに口を近づけたい衝動にかられていく。

聡は身体を彼女に擦り付ける様に歩いている。今にも押し込めたい衝動に駆られるが、若干残っている理性がそれを持ちこたえる。

やがて、女は小さな流れの辺で足を止め、振り向くと聡の目を見つめる。聡には、そこは煩惱の果て、全ての欲望を叶える世界に映っている。

女は、聡のズボンのポケットの膨らみを見て、中の物を出せと言う。そう聞こえる

聡は左のポケットから小瓶を取り出し、前に差し出す。すると、それは違うと言わんばかりに、聡の手を振り払う。

女の期待したものは、現実とのつながりをもつ携帯電話である。振り払われた左手から小瓶が滑る様に落ち、漬け物石大の大きな石にぶつかった。

小瓶は原形を大きく崩し、中から物凄い臭いの液体が零れ出た。辺りの臭いが変わる。聡の視界もその後を追って世界が一変する。煩惱の世界から現実の世界に逆戻りする。

キツネは慌てて零れ出た液体に後脚で土を掛ける。

聡は、現状を把握出来ないまま暫く立ち尽くしていたが、次第に脳が周りの状況を受け止められる様に修正されて来た。

「なんだ！　ここは」

そこには、お伽話かファンタジーか、現実では考えられない世界があった。

ネコと舌を絡める若者、タヌキに覆いかぶさり腰を振る者、裸でへびと戯れる者、（あっ！カワが）カワは上機嫌で酔っぱらっているかの様に、カワウソとしきりに湧き水を飲み、雑草を美味しそうにつまんでいる。

聡の背筋に悪寒が走り、奮えが止まらない。カワに声を掛け目を覚まさせたいが、まだ体が麻痺しており身体が思う様に動いてくれない。

だが、否応にも状況は信じがたいが掴めて来る。少し冷静になって来たのだ。

その時、左のポケットからメロディーが流れた。有名な焼肉のタレのコマーシャルソング。夕食の後、愛子と携帯番号を交換した

時に強制的に設定させられた曲である。

キツネの目付きが変わる。

周りの動物達も顔を上げこちらを向く。

聡が携帯に手をかけようと右手を動かそうとした。すると、身体に怠さがあるが何とか携帯を掴むことが出来た。

「もしもし」愛子の声からは心配と、電話が繋がった安堵感が伝わってくる。

「たすけ を。 カワ も いる。」何とか声になった。急な言葉に愛子は冷静だった。

「今、何処？危険はない？」「ちよつ と 危険 か も。ここは？ 森の中 なん だけど、涌き水が あつて、小川 になつて…。何 処 だろう？ あつ 囲まれた…」その時キツネが携帯を目掛けて、飛びついて来た。

「あつ！」手を引つ掻かれ携帯を落とす。右手の甲にキツネの爪痕が残り赤く滲む。

「もしもし、どうしたの、もしもし…」携帯から愛子の声が響き返る。

キツネは器用に前足で電源を切った。

聡は周りを数匹の蛇やキツネに囲まれた。

（やば、襲つて来るのか？）まだ、聡は走れる程足元が戻って来ていない。

（こんな状態でこいつらと戦うのか・・・）と覚悟したが、なかなか襲つて来ない。

小康状態が続く。

そこへ、テンがピンク色の花を数本加えてやって来た。

また、あの時の芳しい香りが鼻をくすぐり、戻ってきた感覚が再び麻痺しようとする。

（この香りのせいか！ どうする）

極力浅く息をしながら考える。

（そうだ！）左のポケットにそつと手を入れ親指と、人差し指に

力を込め静かに瓶の蓋を開ける。

瓶の蓋を取り中指を入れると、ぬるっという感触がした。

少量だけでもう一本有った。夕食の時の使い残りをポケットにずっと入れたままだった。「きつとこの匂いだ！多分これで覚めた気がする」

聡はポケットの中の小瓶の蓋を軽く閉めると、ポケットから左手を抜きその手を鼻に当てる。

（大丈夫だ。麻痺が止まる。）

愛子は、直ぐに昼間に沼に行った時に見た小さな水の流れが思い出された。勿論それ意外に水の流れを知らないせいもある。

「三奈美。沼に行くところ小さい川があるよね。その先に湧き水はある？」

「ええ、確かそんな話を聞いたことがあるわ。そう、動物達が集まるって。」

「間違ってもいいから、直ぐにそこに行くように電話して」

「わかった」三奈美が急いで、先程来ていた警察に連絡を取る。地元から出ていた捜索隊にも連絡をした。

ヘビが酔わない事を不思議に思ってたのか、聡に近付いて来る。

「少し酔ったふりをして、走れる様になるまでもう少し時間を稼ごうか。」しかし、幻覚を見えているふりは出来ない。キツネはキツネのままだ。清楚な女には見えない。聡にはどんな演技をすれば良いか見当もつかない。

（服でも脱げばいいのか）

テンは強引に聡に花を近づけようとして来た。

ヘビが両足に絡みつかんばかりに寄って来る。

冷汗がでる。（逃られるだろうか？）そう思ったところへ大声が耳を貫いた。

「だれかいるのか」

反射的に考えもなしに咄嗟に声が出てしまった。

「ここだー！助けてくれ！」

叫んだ後に（しまった！！）と思ったが以外にも獣達が襲ってくることは無かった。

聡は、その様子を見逃さなかった。

（叫んでも襲っては来ない）

「こつちだ！」さらに声を振り絞って出来る限りの声を出した。

まもなく地元の捜索隊が現れた。

「大丈夫か？」

「ええ。ありがとうございます。」

「しかし。これはどう言うことだ。」捜索隊は驚きの眼差しで状況を見つめる。獣達は素早く立ち去った。

「実は・・・」

「・・・」

かわは、雑草の食べ過ぎと、水の飲み過ぎでお腹を壊した程度で済んだ。むしろ、心配をしきった三奈美の方が、疲労していた。他の行方不明の3人も衰弱はしていたが、それ以外に問題はなかった。そして、「ありがとうございます。これのおかげだ。」と言い。聡が愛子に礼を言う。

愛子は聡の鼻の下をつまみ「短くなれ〜」と突っ込む。

聡には、愛子の目が潤んでいるように見えた。

翌日から、徹底的に猟師による山狩りが行われた。

ピンクの花も全て刈り取られた。

この事件は、一切の報道にならなかった。警察もただの家出として扱った。

そして1年後。

「はい聡、そつち向いちゃダメ。」

「はい目を瞑って」

「愛子、そんなに見ちゃいけない場所があると歩けないよ」

「綺麗な人を見ると直ぐついて行くから、気をつけないとね」

あれから、聡が愛子と一緒に歩いて綺麗な人が通ると、いつもこんな調子である。

「そくか、じゃあ愛子が一番綺麗ってことか。愛子の後ついて行ってるもね」

愛子が頬微かに染め、一瞬無口になる。が、

「と・う・ぜ・ん」と、胸を張って先を歩いて行く。

聡は後をついて行く。

これから先もずっと・・・

南中の月の下、湧き水のほとりに円陣を組み、一切の声を立てないで

「ネコの気持ちは、分つたよ。捨てた飼い主からのキスが忘れられないのね」と、へビが言う。

テンが言う「ところでタヌキの雑誌の切り抜きは、だれだったかね」

「あれ、確か漬物のような名前の”キムチ”とか”たくあん”とか。なんだったかね」

タヌキが言う「キムタクですよ。テン婆。」

「タヌキは面食いだね」カワウソが言う。

「へビはマンガで、カワウソはメガネっこ。キツネはサラリーマンね。みんな色々じゃの」

テン婆が笑う。

「ほれ、花は咲いたぞ。しかし、この花は7日もすれば全て枯れ

てしまう。よいかの・・・みんな
「

< 終
わ
り
>

(後書き)

もしかすると、男性と言う生き物の最大の欠点は性欲と言う煩惱の大きさで、これは、女性と言う生き物の性欲に対する理性によって均衡が保たれているのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7886h/>

森の密談

2011年11月16日13時33分発行